

おけらの夢 宇野信夫

杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野

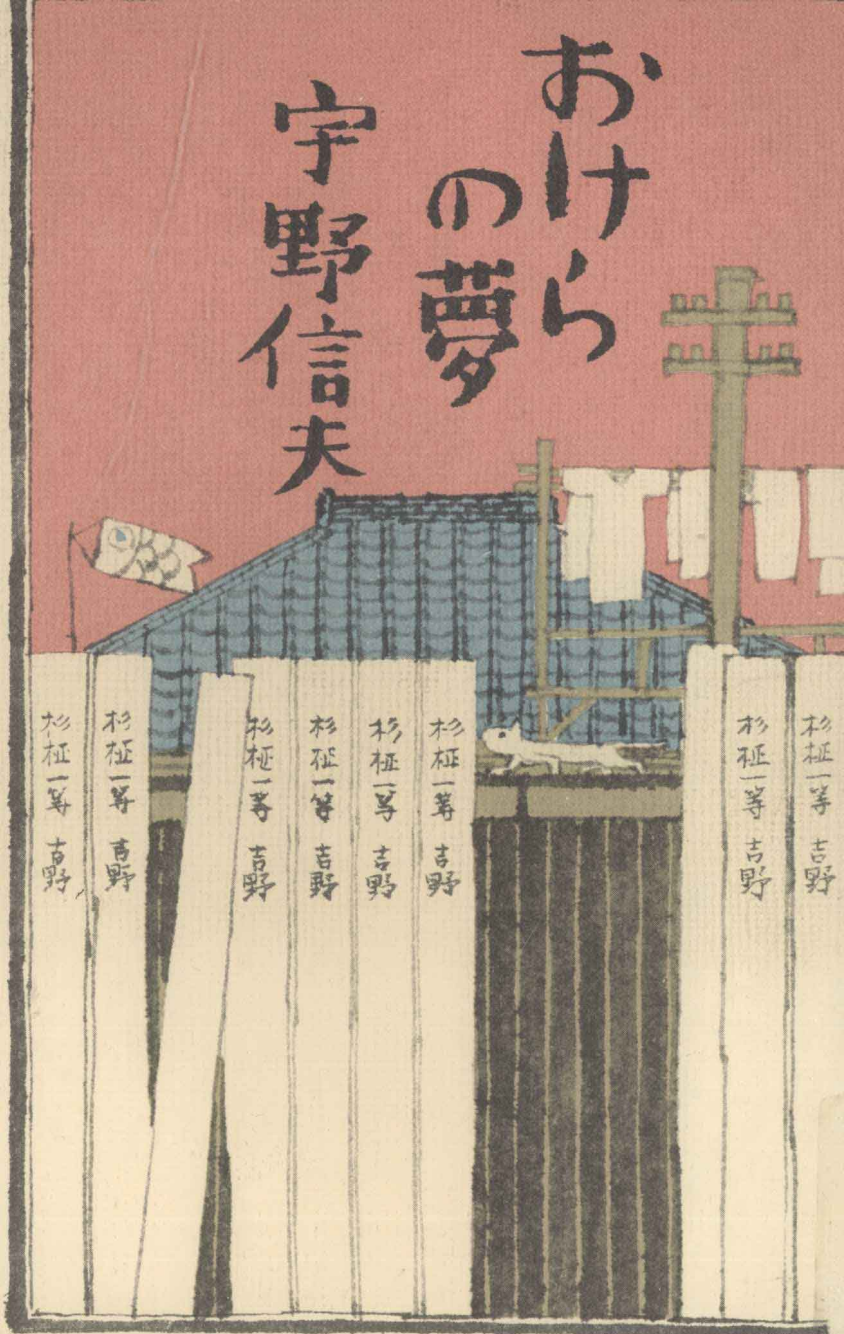
杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野

杉柙一等 吉野



おけらの夢

野信天

講談社

◎著者略歴

1904年埼玉県本庄市に生まれ、東京浅草で育つ。慶応大学在学中より戯曲を書きはじめ、昭和8年に「ひと夜」でデビュー、昭和10年に発表した「巷談宵宮雨」で劇作家第一人者となる。

放送文化賞、芸術選奨、菊池寛賞、大谷竹次郎賞を受賞。昭和47年に芸術院会員となる。著書に「ひと夜」「自選作品集」「宇野信夫戯曲選集」「江戸の小ざなし」「大部屋役者」「しゃれた言葉」など多数がある。

おけらの夢

1981年6月30日 第1刷発行

著者——宇野信夫

定価——1200円

©Nobuo Uno 1981. Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 〒112

☎ 03-945-1111 (大代表) 振替 東京 8-3930

装幀——安野光雅

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

●落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

0093-458786-2253 (0) (学2)

おけらの夢

「ここに四畳半がなかったら、うちの中に、かくれるお部屋が一つもないじゃないの」

「それもそうだ——」

「フイにお客様がきた時なんか、どうするのよ。それに、病気になった時なんか、ここでゆっくり寝られるし——南向きでしょう、とっても日当りがいいわよ。明るいガラス戸に一ぱい日が当って——ここに張り出しをこさえて、ベゴニアの鉢を置くの。ねえ、いいでしょう。四畳半、ふやしてよ」

「ふやしてもいいがね」

「じゃ、きまつた、と」

「予定の坪数より、大分超過しちゃった」

「仕方がないわよ。あ、北ね、ここ——」

「そうだね」

「窓をきつてよ。北に窓がないと、風が通らないでしょう。暑くって暑くって、夏はたまらないわ。あたしのおうちがそうよ。この夏のつらさってなかったわ」

「しかし、窓は、あかないな。ほら、八畳の壁が、ほら、ここまできてる——」

「ほんと。困ったなア。ねえ、なんとかならない？」

「さあ——」

「工夫してよ」

「うん」

「それから、やっぱり二階もほしいわ」

「賛成だな。この四畳半が、君の部屋、二階は、僕の部屋だ」

「賛成！」

「六畳一ト間まだな」

「それより、四畳半と三畳二タ間にしない？ 有効に使えるわよ」

「いいけど——坪数がふえるからな」

「いいじゃないの、その位」

この対話を読まれた読者は、何不自由のない婚約者同士が、若い頬をほてらせて、新居の設計に余念のない姿を想像されることだろう。そして今時暢のんき気な話だと、多少反感をもたれる人があるかもしれない。しかし、その想像は、はずれている。若い者同士であることに違いはないけれども、二人は何不自由のない婚約者同士ではない。また正式に婚約もしていない。もともと二人だけは暗黙のうちに、将来は結婚することにきめてはいる。

それから、ことわっておきたいのは、ここへ出てくるのは、終戦から五、六

年たった頃——東京の下町にはまだ至る所に焼野原のあつた時代の人たちである。

男は、毛利要吉という電気屋の主人。電気屋というときこえがいいが、しもたやの入口を改造した猫の額ほどの店のあるじにしかすぎない。

女性は、時田とき子——この電気屋の右から一軒おいて隣に住む倉庫番の一人娘である。今、勤め先への行きがけに、要吉の店に寄つて、修理のために持ちこまれたボロボロのラヂオや、売物の電球の入った埃だらけのボール箱の山の蔭にかくれるように腰かけて、小声で話しあつてゐるところだ。

二人の間には、一枚の方眼紙がひろげられてある。それには一軒の小ぢんまりとした住宅の平面図がかかれてある。

「お庭は何坪？」

「十坪」

「十坪あれば、いろんな木が植えられるわ。花壇をこさえるのね。シネラリ

ヤ、アネモネ、フリージャ、ケン、おしろいばな白粉花——」

とき子がうつとりすると、電気屋の主人も、それにつりこまれて、少し節をつけて詩を口ずさむ。

「おしろい花の黒き種子たね、爪を入れるれば粉こなの散りぬ、幼な心の憎しみは、君のきたらぬつかの間か——」

それは少年の日におぼえた白秋の詩だ。何かにつけて、記憶にある詩を口ずさむのは、要吉のくせである。

「ねえ、塀はどうする？」と、とき子はすぐに方眼紙にもどる。

「やっぱり生垣だろうな、柵木さくか杉の——」

「駄目、そんなの。低い柵さくがいいわ。白いペンキを塗って——。ほら、映画によく出てくるじゃないの。アメリカの郊外にあるお家うちの」

「しかし、持ちの点で、どうか」

「駄目駄目」

「しかし——」

「駄目よウ——」

二人がかりの設計は、なかなかまとまりがつかない。二人が夢中で議論をたたかっている間に、この横町について、説明をしておこう。

上野の車坂——戦災を免かれた大きな古材木屋の、材木置場の長い塀にむかいあって、もう寿命のきている老朽家屋が何軒か^{ひまし}廂を並べている。

関東大震災のあと、この車坂界限に、おけらがひどく出たことがある。この横町の家屋には、殊にひどかった。所きらわず、網ですくう程に出た。そんなことが、新聞にまで報道されたので、それ以来、おけら横町と呼ばれるようになったのである。

横町の入口が理髪店、嘶家や日蓮宗の行者やこの電気屋——電気屋は、ほとんどこの横町のまん中に位している。

今、この電気屋の前にさしかかった男がある。九月なかばで、朝晩はもううそ寒いというのに、よれよれの浴衣に、濡れ手拭をぶら下げている。朝湯の帰りだ。電気屋の隣に住む嘶家の浮世亭きん楽である。

彼は足音をしのばせ、店の前に立って、そつと内をのぞきこむ。そして電球の箱の蔭で額をあつめて、しきりに揉めて^もいるま上から、

「よう、御兩人！」

「アラ、きん楽さん」

「アラきん楽さんじゃないよ。どうでもいいが、お勤めはどうしたの」

「おそ番よ」

「おそ番だかはや番だか知らないが、あんたが毎朝お勤めの行きがけに、ここへしけこんでるのは、ちゃんとこの眼で睨んでるんだぜ。あたしばかりじゃない。この横町の者は、みんな知ってます。お父ッつあんの耳に入ったら大変^こだぜ」

「大きなお世話」

「あんなことを言ってる。あんたの為を思やアこそ、親切にそう言ってるんじゃないか。あんたのお父っさん、今でこそ倉庫番なんかしてるが、昔は陸軍中佐だった。世が世なら、あんた立派なお嬢さん、そのお嬢さんが風紀を乱しちゃア困るなあ」

「知らないわよ！」と、舌を出してみせたかと思うと、素早く店から飛び出して、

「さよなら！」

そのうしろ姿を、きん楽はしばらく見送っていたが、

「しかし、いい子だな。争^でわれないもんだ、出^でが出だけに、どっか品があるね」としきりに感心してから、

「ねえ、電気屋さん、私には、へんな病^{やま}いがあつてね、若い男女がいちやついてるところを見ると、たちまち、こう、下ッ腹がつつてくるんだ。いいえ、ほ

んと。だからね、私ア、アベックが歩いてると、わざとその真ん中を突ツきつてやるの。一時的でも、はなればなれにさしてやると、胸がすウつとするんだね」

「そうですか」

要吉は、ラヂオの修理にかかる。

「そうですか？　悪く落ち着いてるんだなあ。天下の色男おれ一人つてな顔を
して——」

そして積んだラヂオに肱ひじをついて、つくづく要吉の横顔を見て、

「しかし、当節はこういうのが売れるんだね」と、独り言ひとりごと。

「なんですか」

要吉には嘶家の毒舌は通じない。

「しかし、電気屋さんの前だけど、鳴かない猫が鼠をとるってね」

「なんです？」

「いえさ、色男だつてこと」

「誰が？」

「あんたがさ。しつかりして下さいよ」

「面白いなア、きん楽さんは」

「面白いっていやア、床屋のマスター、今、湯屋ゆちやで一緒になつたがね、相当なタマだねえ、あの人。湯ン中で、さかんに経済論をぶつてゐるんだよ。まともにあの人の演説にぶつかつちやア大変ことだから、早々に退散してきちゃつた」

「マスター、いまに理髪センターをこさえるんですつてね」

「現内閣の予算については、大いに不満なんだつて。今の予算じゃア、到底松井理髪店はやってけねえんだそうさ。この分でゆくと、近い将来に、中小企業は瀕死の状態に追いこまれるであらう、つてなことを言つてたよ」

「そうですか」

こんがらかつたラヂオの線をほごしながら、要吉は体裁ていさいにうなずいてみせ

る。

「そこへゆくと、こっちは、予算がどうだろうが、知ったこつちやアないけどさ、せめてラヂオぐらい買いたいね。どう、安いのはありませんか」

要吉は腰を上げて、棚から小型のラヂオをおろすと、フッフツと埃を吹いて、

「中古ですから安いですよ。一流メーカーの製品です」

「おいくら？」

「二千円」

「二千円？　びっくりさしちやアいけない。二千円ありやア、私は地所を買います。少し負けてよ」

「どの位？」

「二百円」

「二百円引くんですか」

「とんでもない、二百円に」

「冗談じゃないですよ」

「冗談冗談——実はね、今夜、私の放送があるの。女房と子供にきかせたいからね。きかしてやって下さいな」

「いいですよ、何時なんじから？」

「それがね、ばかに結構な時間なんだってさ。昨日、局へ行つて、テストつてやつをやつてきたんだがね。ほら、タバコの名前みたいな時間さ。ゴールドン、なんとか——」

「ゴールドン・アワー」

「それぞれ。九時から十五分。あんたもきいてよ」

「ききます」

「じゃ、女房と子供を頼みましたよ」

そう言つて、きん楽は店から出たかと思うと、